
原宿ワッフル

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原宿ワッフル

【Zコード】

Z9617C

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

あたしの別れた彼氏には、妙な癖があつた。それは、「これ、おいしいよ」と自分の皿から食べ物を切り分け、あたしに寄越す癖だ。そんな彼氏の行動に子供っぽさを感じていたあたしは、その彼を振ってしまう。正直、思い出すのも億劫なヤツだけれど、なんでだろう、原宿に足を踏み入れると、やけにアイツのことを思い出すんだ。・・・・・ってティストです。

あたしの別れた彼氏には、妙な癖があつた。

それは、食事のときの事。

「これ、おいしいよ」

と自分の皿から食べ物を切り分け、あたしの皿に寄越す癖だ。多分、傍から見れば微笑ましいカップルの、微笑ましい光景だったのだろうけど、あたしはいやでいやでしようがなかつた。だって、なんだかバカっぽい光景だし、すぐチャイルディッシュな光景だつたから。

思えば、あの彼とは、最初から最後まで噛みあわなかつた気がする。

彼は付き合っていた当時18歳だつたけれど、歳よりはるかに幼かつた。なんと言つたらいいんだろう、まるでお前は中校生かよ、と突つ込みたくなるような行動と言動をするヤツだつた。いいヤツだつたのは認めるけど、なんだか会つたび会つたび「馬鹿なことをしないか」とハラハラし、そして馬鹿な行動を起こされてはイライラしていた氣がする。

そんな付き合いだつたんだけれど、どうしたわけかダラダラと付き合いが続き、そんなダラダラ感に嫌気が差した頃、あたしから振つてやつた。そのとき、彼は本当に残念そうな顔を見せて、「そつか」とだけ言つた。そして、あたしに背中を見せると、まるで母親に怒られた子供みたいに走つて行つてしまつた。最後まで子供っぽいヤツだな、と、そのとき呆れ返つたのを今の事のよつて覚えている。

正直、思い出すのすら億劫なヤツだ。けれど、何でだろう。原宿に行くと、やけにアイツの事を思い出す。

東京・原宿。

相変わらず「ファッショń」に押しつぶされそうな街だな、と、あたしは改札をぐぐるたびにいつも思う。ファッショńに命を懸けているかのように、己を着飾りまくつた男と女。そして、「服を着るのは人間の義務！綺麗な服を着るのも人間の義務！！」と言わんばかりに、今年流行とかいうきらびやかで高い服を売つている店たち。服を着るのは確かに人間の義務だけれど、綺麗な服を着るのは権利でしかない、という考えのあたしにとつて、日本の流行ファッショńの発信地・原宿なんて、ただ人が多いだけの場所でしかない。じゃあ、なんで文句を言いながらもそんな場所に足を向けるのか、つて？いやならそんな場所に行くんじゃないよ、つて？

それは、明治神宮がそこにあるからだ。

明治神宮。確かそこは、明治天皇を祭神に祭つた神宮だ、つてことは知つてゐるけれど、かの神宮について知つてゐる情報はただそれだけだ。けれど、あたしはあの神宮が好きなのだ。

まるで原生林のように、何者も受け付けない雰囲気を醸す杜。^{もり}あ
れが好きで好きでしようがないのだ。結構、新宿御苑とか、靖国神社なんかも綺麗でいいのだけれど、やっぱり明治神宮の、「手の入つていらない風」な杜がたまらなく好きなのだ。なんだか、孤高な感じがして、あたしの波長に合う気がする。

でも、あたしの大好きな明治神宮の最寄り駅は、よりもよつて原宿駅なのだ。なんであるか街に、いや、なんで東京なんかにあんな鬱蒼とした森があるのか、あたしには見当もつかないし、腹立たしくすらある。

そんなんわけで、あたしは今日も原宿駅に降り立つた。

でも、なんだか。あたしは思った。今日は、あんまり明治神宮に行く気もしないな。

今日は、16時から大学の講義がある。それで、今は14時。暇つぶしの意味もあつて原宿に降り立つたのだけど、なんだか明治神

宮に行く気が失せてしまった。

あたしは、どうもそういうのがある。よく「口口口」と気が変わるので。

言い訳をするようであれなのだけれど、明治神宮っていう場所はどうもあたしの気を変えさせるような気がする。あたしとしては、「明治神宮の毒気がそうさせるのだ」と思っている。明治神宮の杜つて、あまりに生命力に溢れすぎているのだ。だから、本当に疲れたときには行きたくなくなる。だつて、街灯がない夜道、灯りもなしに一人歩きをするのは嫌でしょう？日々の生活に疲れ切った状態で、遊園地に行きたくないでしょう？多分、明治神宮という場所は、エネルギーに溢れすぎている。だから、あたしの気がこじろこじろ変わることだ、と言い訳しているのだ。

そういうえば、とあたしは原宿駅近くのガードレールに腰を預けて思った。あいつにも、明治神宮がらみでは迷惑かけたな、って。

別れた彼と、よく明治神宮に行つた。もちろん、発案はあたし。「ねえ、明治神宮行こうよ」って。彼は、いつも笑顔で頭を縦に振つた。まるで、水飲み人形のように。その仕草がバカっぽくて、それもいつそ腹立たしかつたのだけど。でも、あたしは「明治神宮の毒氣」に当たられて、結構何度も「口口口」と予定を変えた。「明治神宮、行きたくなくなっちゃつた」って。でもその度に彼は残念そうな顔を見せた。「明治神宮、行きたかつたな」って。

あたしは、ガードレールから体を起こすと、ハア、とため息を吐いた。

明治神宮は気が向かない。じゃあ……。

あたしは、竹下通りに足を向けた。

竹下通りは平日の午後2時ころでも、人でごつた返している。いつたいここにいる人はいつたいどういう人種なんだろう、こんな時間にこんなところ歩いていいのか、と首を傾げた。案外、世の中の人は暇なんだな、とあたしは一人合点する。

でも、あたしは竹下通りを歩く人たちのように、軒並み並ぶ服屋

には用がない。用があるのは、竹下通りの入り口にあるワッフルがおいしい喫茶店だ。竹下通りの入り口付近にあるし、しかも老舗ということもあり結構人の入りが多い。あたしは、今日も人の入りがそれなりにいい、そのカフェのドアを引いた。

そういえば、窓側の席に案内されて、椅子に座つたあたしはまた思い出した。よく、アイツと来たんだよな、ここ。

明治神宮に行きたくなくなつたとき、あたしたちは決まり」とのようによこのカフェに足を伸ばした。そして、ああでもないこうでもない、と取り留めの無い会話をしていた。今にして思えば、よくこんなうるさいところで会話なんてできたな、と、ガヤガヤという喧騒に溢れたカフェの、テニスコートくらいの広さがありそうな店内を見渡した。

どうやらあたしが店内を見渡したのを、注文をしようとしているのと勘違いしたのだろう、あたしと同年代だろう、リストみたいに可愛らしいウエイトレスがあたしの席までやつてきた。ここで注文しないのはバツが悪いので、適当にお品書きの中から「きなこのワッフル」とコーヒーを頼んだ。ウエイトレスは、空に突き抜けんばかりの笑顔を見せて踵を返すと、オープンキッチンの方に向かつた。あたしはなんとなくそのウエイトレスのことを目で追つていたのだけれど、そのウエイトレスはオープンキッチンの若い男に何事かを言つたあと、手を挙げていてる中年の男二人組の座る席へ向かつていった。

急速にウエイトレスに興味を失つたあたしは、店内を見渡した。あたしの前の席では高校生4人組が、ムカつく先生の悪口を延々としゃべっている。斜め横の席には、スポーツ新聞を熱心に読みふける老人にも近い中年が座つている。そして、向こうには家族連れやらおじやらおばさんやらの席が並んでいた。けれど、あたしの人生に関わりがまるでないという意味で、あたしにとつては背景でしかない。

そんな店内にも嫌気が差した頃、あたしの前に注文したワッフル

とコーヒーが運ばれてきた。

あたしは両手を合わせると、フォーカクとナイフを手にとって、ワッフルの角を切り取つて口に放りこんだ。そして、もきゅもきゅと噛みしめる。

きなこのワッフル、というちょっと地雷かもな、といつワッフルを頼んだにも関わらず、このワッフルはおいしかった。ワッフルのさくつとしているようでモフッとした感触、そして、きなこの持つ自然な甘みが混ざつた、上品なお味。

そういえば、あたしはまた思い出した。アイツは……。
別れた彼は、よくここで自分の皿からワッフルを切り分け、あたしの皿に載せたんだつけな。

自然と、ため息が出た。

あたしは、ため息と一緒にコーヒーを飲み込んだ。
でも、実は、あたしにだつてわかってる。ど、コーヒーを飲みながらあたしは思った。

なんで、彼があんなにも自分のワッフルを切り分けてあたしにくれたのか。

きっと、共有したかつたからなんだ。

きっと、あたしと、ワッフルのおいしさを、共有したかつたんだ。
いや、多分、それだけじゃない。きっと、あたしと過ごす時間を、共有したかつたんだ。いや、もしかすると、「あたし」を、あたしと共有したかつたんだ。

けれど、あたしは空になつたコーヒーカップを置いた。

共有なんて、ただの幻想。だって、そうじやない? だって、あなたは・・・・、とあたしは頭の中にある彼の面影に話しかけた。・・

・あなたは、あなただもの。

だって、あたしはあたしで、あなたはあなた。だってあなた、コーヒー嫌いだつたじやない。コーヒーが好きで、ゴクゴクと飲むあたしに向かつて、苦々しい顔をしながら「よく、こんな苦いものが飲めるね」って言ってたじやない。

そう、同じものを前にしても、同じ感想を持つとは限らない。だつて、人間はみんな違うんだもの。だつて、あなたはあなたでしかない。あなたは、あたしじゃないの。だつて、「甘い」ものだって好きな人もいれば嫌いな人もいる。それはしょうがないことじゃない。

あたしは、ため息を吐いた。

あたしのコーヒー カップが空になつていたのを目さびくも発見したウエイトレスが、コーヒーを注いでいった。一瞬、苦いコーヒーの香りが広がり、店内の空気に溶けていった。

でも、あたしはコーヒーの、黒い水面を眺めながら思つた。

共有できたら、どんなに幸せだろう。

この「きなこのワッフル」のおいしさを共有できたら、どんなに偉せだろう。

あたしは、「きなこのワッフル」を切り分け、口に運びながら思つた。あたしには、そんな人が見つかるのかな。このコーヒーを、「おいしいね」と言いあえる人に。この「きなこのワッフル」をおいしいと言いあえる人に。

そして、あたしは「きなこのワッフル」を噛みしめながら、思つた。

アイツにも、見つかると良いな。そんな素敵なお人が。

店内に居た女子高生グループが、当たり前だけれど、あたしを残して先に席を立つた。そして、窓の外では、あたしに対し干渉するでも傍観するでもなく、ただ蕭々と人の波が流れしていく。

そして、あたしのためだけに出されたワッフルは、持て余し気味に、皿の上にまだ原型を留めていた。

(後書き)

「」感想、「」批評、お待ちしております（切に）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9617c/>

原宿ワッフル

2010年10月8日15時16分発行